

2010年4月28日発行

江戸遺跡研究会会報

No. 122

江戸遺跡研究会

<http://www.ao.jpn.org/edo/>

江戸遺跡研究会 第125回例会のご案内

日 時：2010年5月19日（水）19:00～

内 容：越田真太郎氏（桜川市教育委員会）
「真壁陣屋跡の発掘調査」

会 場：江戸東京博物館 学習室2

交 通：J R総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営地下鉄大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内・成瀬） 03-5452-5103

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第124例会は、2009年3月18日（木）午後7時より江戸東京博物館会議室にて行われ、小坂井孝修氏より以下の内容が報告されました。◇

内藤町遺跡 —環境省新宿御苑内の大温室地区の調査—

小坂井 孝修

(東京都埋蔵文化財センター)

1. はじめに

内藤町（新宿区No. 56）遺跡は、新宿区内藤町に所在し、国民公園「新宿御苑」の新宿区側を占め、遺跡範囲は、新宿御苑内の北側半分の新宿区側にあたる。渋谷区側は、西側で千駄ヶ谷遺跡として、縄文時代や江戸時代を中心に遺構・遺物が検出されている。

調査の原因は、環境省新宿御苑管理事務所による大温室の建替えに伴う事前調査である。調査機関は、平成21年3月24日から10月7日まで、4,385㎡を対象に行った。今回調査した地点は、四谷大木戸にあった表御門内側の南西部にあたり、新宿区遺跡調査会で行った第3次調査の西側で、屋敷内の北を東流する玉川上水の南側、表御殿の北西側に当たる。

2. 遺跡の沿革

内藤町遺跡は、武蔵野台地の東端で、下末吉面の淀橋台地上に位置し、標高は約34mになる。渋谷川の源流域にあたり、支谷が樹枝状に幾筋にも分岐し、起伏に富んだ地形を呈している。今回調査した区域の南西地点では、明治初期に埋め戻された急峻な谷が検出され、旧地形の影響をうかがい知ることができる。

遺跡は、縄文時代の堅穴住居跡や土坑などの遺構が、河川に面した低地部分で検出されている。その後は、江戸時代になってからの遺構が検出されている。江戸時代の初期に、徳川幕府譜代の内藤清成が下屋敷として拝領し、幕末まで屋敷地として利用されている。

明治時代に入り、大蔵省が進める近代農業振興のための「内藤新宿試験場」となり、明治7年に内務省に所管が移り農業振興政策のための教育施設「農事修学所」となる。明治12年に宮内省所管の「新宿植物御苑」となり花きの栽培を始め、動物園、農園など皇室の御料地・農園として運営された。皇室の御料地・農園として運営された。華族の養蚕事業、などを行った。第二次大戦後の昭和24年に「国民公園新宿御苑」となり厚生省が所管、昭和46年に環境庁、平成13年に環境省へと所管を移し、現在に至っている。

3. 検出された遺構・遺物

1) 旧石器時代 遺物 石器剥片

2) 縄文時代 遺構 陥し穴状土坑2 遺物 早期から後期の土器片34

3) 江戸時代 遺構 建物跡2 地下室1、土取り穴4、道路跡3、土坑15、井戸2、炭焼窯1、溝14、
焼土2、ピット71、畑跡1、植栽痕10

遺物 陶磁器・かわらけ、土製品(土人形・ミニチュア、泥面子、基石)、瓦、石製品(硯、砥

石、軽石、碁石、温石、挽臼、石臼など)、ガラス製品(簀)、金属製品(鉄製品: 刀子、鎌、鍬、火打金、鍵、釘、鉄滓など 銅製品: 煙管、簀、箸、鑑金具 鉛製品: インフィールド銃の弾)、銭貨(元禄一分金、寛永通宝、雁首銭)

- 4) 近代遺構 温室(基礎1、ボイラー室・貯炭室1、排水施設・陶管溝6、枡2)、土坑2、溝1
遺物 陶磁器、陶器管、煉瓦、ガラス製品(瓶、板ガラスなど)

4. 調査成果

今回の調査区域は、近代に大蔵省や内務省の勸業寮農業試験場や宮内省による、土地の利用と改変によると思われる表土や富士黒色土、立川ローム上部の削失が窺え、近世以前の遺構・遺物の残存状態が芳しくなかった。しかし、限定的とはいえ検出された遺構・遺物から大名屋敷としての下屋敷として構造がおぼろげながら分かってきた。

縄文時代は、陥し穴状の土坑があり、平面形状の異なる2基が検出された。遺物には、土器がり、早期後半の条痕文系土器、前期後半の諸磯b式土器、中期後半の加曾利E式土器、後期前半の堀之内式土器が近世遺構の覆土などから出土している。

江戸時代に入り、調査区の東端で南北に走る1号道路跡が検出され、その西域で調査区域の中央部分の多くには遺構の少ない空間があり、その中で南北に走る大溝が2条検出された。道路跡と西側で南北方向に走る6号溝との間には炭焼窯や畑跡などの生産に関する遺構がある。これらより古い時期には、道路跡や6号溝を斜めに横切る7・8号溝が検出されている。7・8号溝は、新宿区が平成元年に北側を調査した際にも、溝の延長部分が検出されている。

6号溝のさらに西側で蛇行する9号溝との間には、17世紀中葉を思われるかわらけを埋設した小土坑や18世紀末から19世紀初頭に掛る遺物を廃棄した土坑や区画溝などが見られ、東端の道路から9号溝までの間は空き地とされていたようである。この区域は、製作時期不詳の絵図には通路や林の空間として描かれている。

9号溝から西は、居住空間として利用された区域で、建物跡を始め、地下室、井戸、土採穴、道路跡、区画溝、植栽痕、土坑などが検出された。前述した絵図にもあるように、下屋敷在番の藩士の居住する長屋などの施設が会った空間と考えられる。また、調査区の南西端では近代初期に埋められていたと思われる谷が検出された。谷へ下るための九十九折の道路跡(3号)も検出され、調査範囲内で確認できた谷底は現地表から5mほどまでが確認でき、4mを超えたあたりから豊富な水量の湧水が出ている。谷に関しては、前述の絵図には描かれていない。

出土遺物から考えられる、遺構の廃棄段階は、大きく以下のように考えられる。

- | | | |
|-------|--------------|----------------------------|
| I段階 | 17世紀中葉 | 地鎮遺構(5号土坑) |
| II段階 | 18世紀中葉～後半 | 2号道路跡、8号溝、など |
| III段階 | 18世紀末～19世紀初頭 | 1・2号建物跡、1号炭焼窯、6・7・9・10号溝など |
| IV段階 | ～19世紀前半 | 1号地下室、18・32号土採穴 |
| V段階 | ～19世紀中葉(幕末) | 1・3号道路跡など |

近代は、温室の基礎部分や関連した排水溝、枡などと土坑、ピット列が検出された。検出された温室は、煉

瓦建物として日本人の設計では 2 番目に古い建造物で、温室としては最初の建物である。今回検出されたものは、明治 25 年から 29 年にかけて建設された「E」字形をした 3 連棟ある施設の一番東側の基礎部分で、明治 28 年に建築され部分である。新宿御苑管理事務所の記録によると、明治時代から大正、昭和初期にかけて、何度か増改築を繰り返している。現在残っている基礎は、使用されている部材などから、基礎部分はそのま利用され続け、大正期以降は上屋だけが造り替えられている。また、新たにボイラー関連施設、排水施設（土管）が新設や改築されているが、使用できる部材（煉瓦を排水柵に）は再利用して建替えているようである。

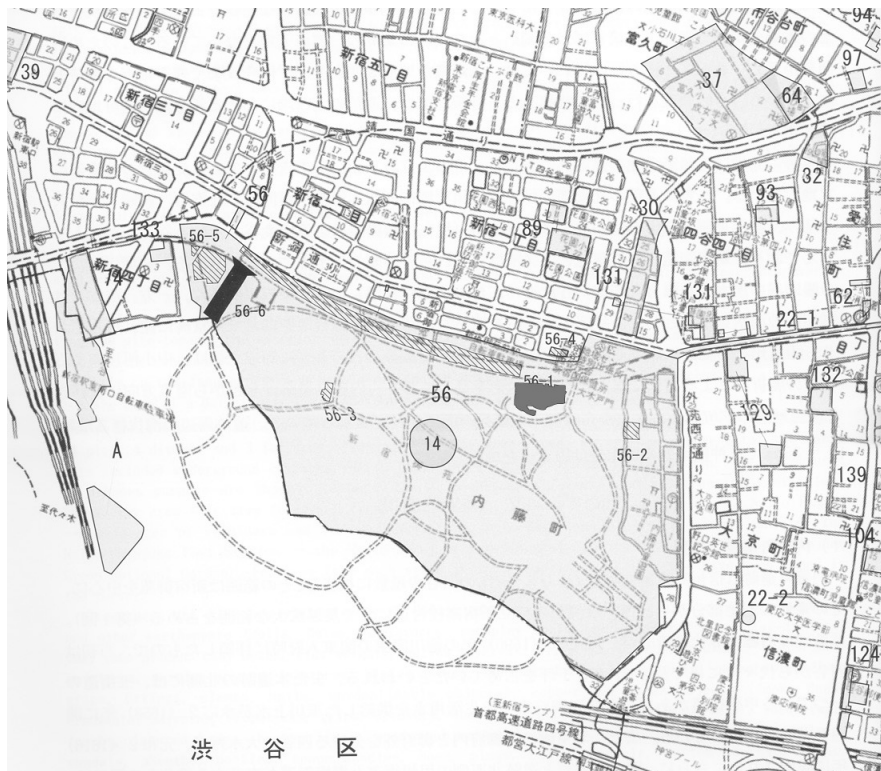
近代の遺構には、温室関連の遺構のほか、土坑、溝、ピット列などが検出された。2 基ある土坑内からは、「宮内省」と書かれた碗や「宮」と意匠化して書いた碗と蓋、ガラス瓶（ワインボトル、「M」印インク瓶）、板ガラス、釘などが焼け焦げた木材などと一緒に出土している。ピット列は、大正期に建設された温室の基礎部と重複している、大正期に建設された温室が建つ前までは機能していたと考えられる。

温室の基礎については、環境省新宿御苑管理事務所と国土交通省関東地方整備局、東京都教育委員会の 3 者協議により、保存となり、新温室の一部として展示されることに決定した。新宿御苑大温室は、平成 23 年 3 月に新規開館の予定である。

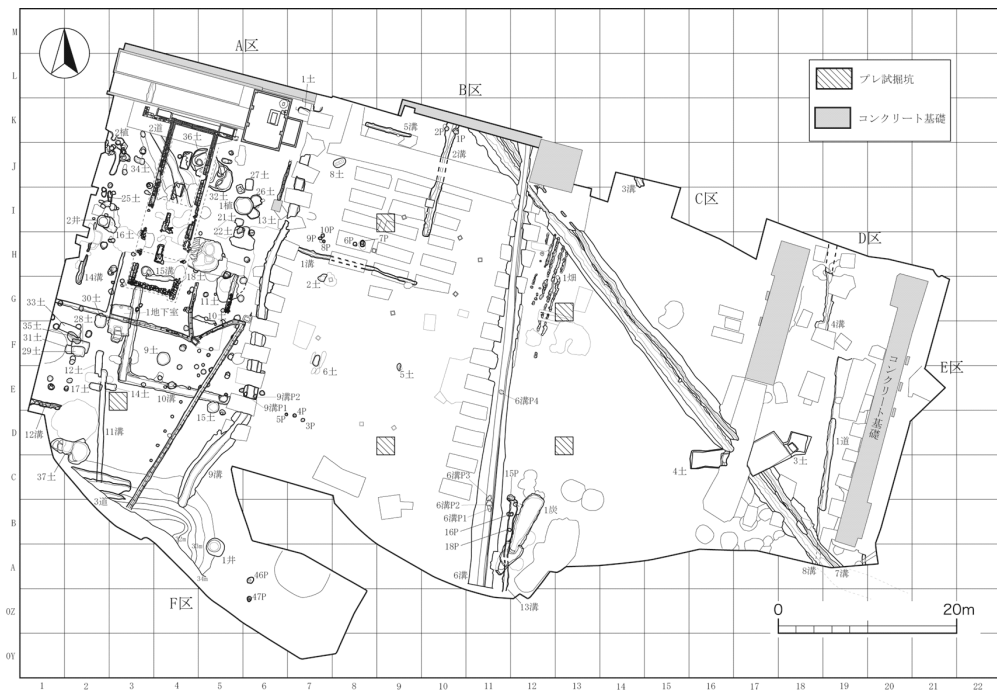
現在、遺物整理中であり、報告書の刊行は平成 22 年 7 月末の予定である。

参考文献・資料

- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡」
新宿区内藤町遺跡調査団 1997 「内藤町遺跡」II
新宿区生涯学習財団 2001 「内藤町遺跡」III
新宿歴史博物館 2008 『内藤清成と高遠内藤家展』開館二十周年記念特別展
国土交通省関東地方整備局 2001 「新宿御苑旧管理事務所外保存等検討業務報告書」
財団法人建築保全センター編
東京都埋蔵文化財センター 2002 「内藤町遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第 118 集
東京都埋蔵文化財センター 2007 「内藤町遺跡」 東京都埋蔵文化財センター調査報告第 202 集
東京都埋蔵文化財センター 2009 「千駄ヶ谷大谷戸遺跡・内藤町遺跡」 東京都埋蔵文化財センター
調査報告第 233 集
伊那市立高遠町歴史博物館・高遠町図書館蔵—江戸期下屋敷関連の絵図
「四谷下屋敷絵図」、「江戸藩邸図 藩邸内諸長屋配置図」、「内藤宿御下屋舗古絵図」



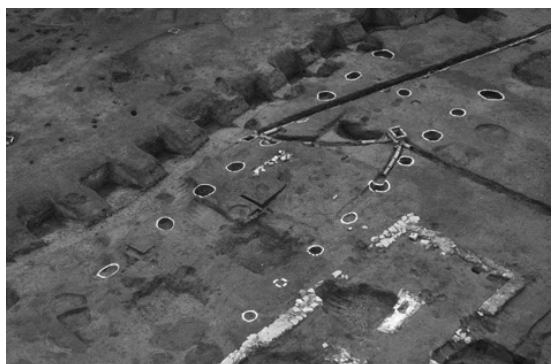
第1図 遺跡の位置



第2図 内藤町遺跡大温室地区遺構分布図



第3図 調査区全景(北東から)



第4図 1号建物跡



第5図 地下式室



第6図 18世紀後半～19世紀代の遺構検出状態



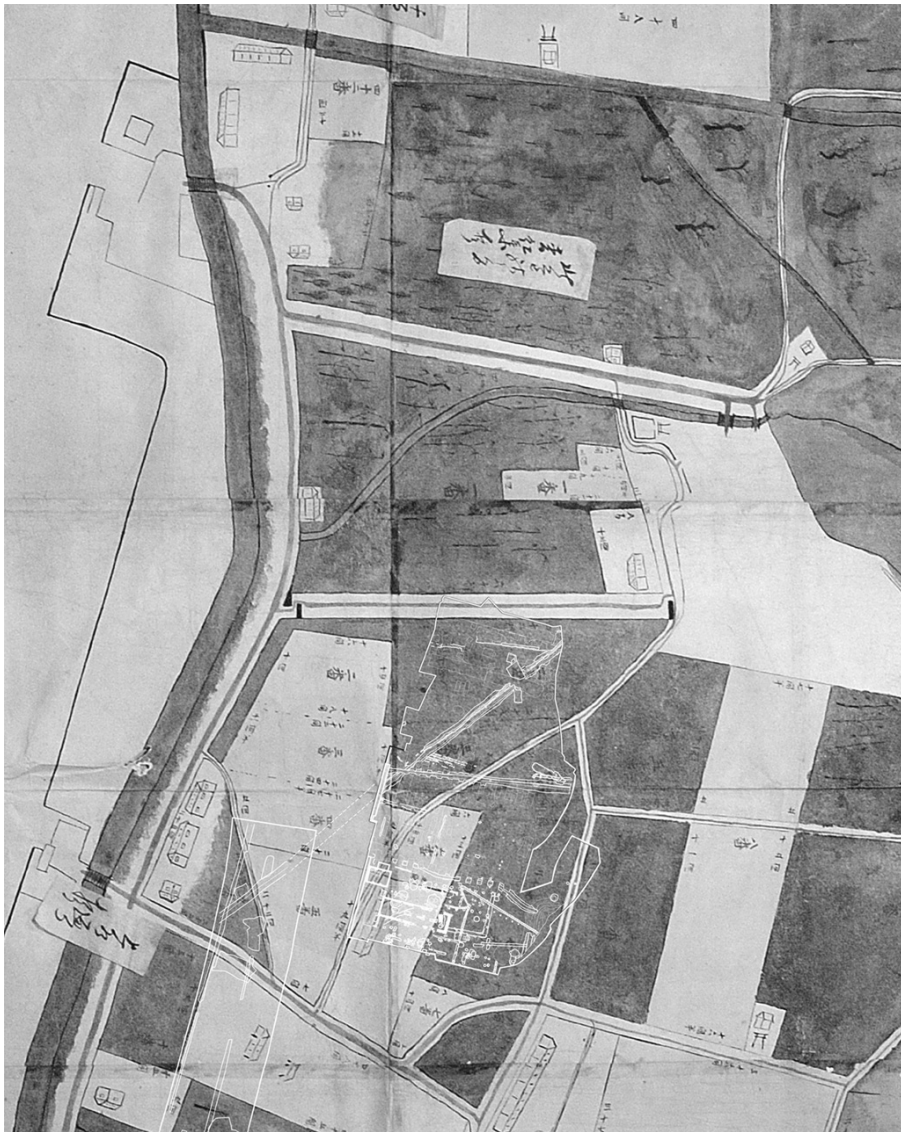
第7図 5号土坑



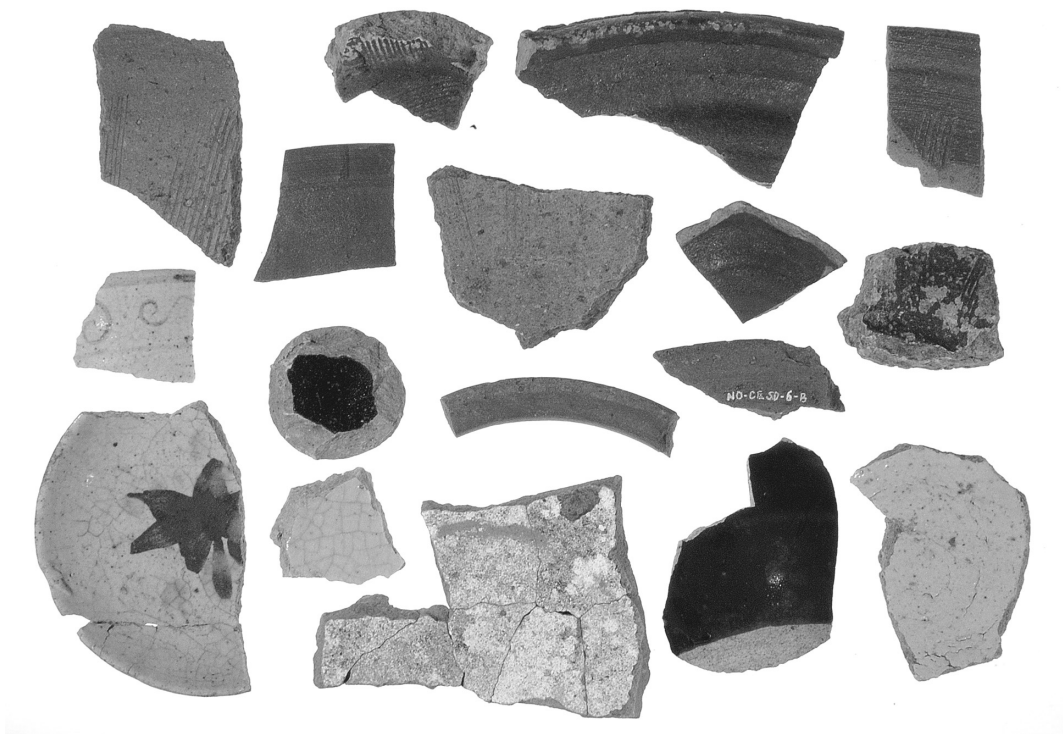
第8図 炭焼窯



第9図 6~8号溝検出状態



第10図 四谷下屋敷絵図と調査区の遺構状態重ね図



第11図 16~17世紀代の陶器類



第12図 18~19世紀代の陶磁器類



第13図 近代温室基礎と関連施設検出状態



第14図 「宮内省」銘の磁器碗

- 都市江戸のやきもの - に参加して

都築由理子

(早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程)

今大会は都市江戸のやきものをテーマに2010年1月30日・31日の2日間行われた。過去にも江戸遺跡研究会ではやきものをとりあげた大会があった。まず、第12回大会では食器としての陶磁器という、用途と機能が衣食住という限られた生活空間の復元がおこなわれた。しかし、今大会では資料の集成が進んだことで玩具などの趣味的な製品の報告が多く、やきもの総体として生活復元をおこなった点が異なっている。また、生産地と消費地の情報精度の向上と拡大で全国レベルでの遺物の数量的把握ができるようになり、生産・消費・流通をとおした江戸を捉えられるようになった点もかつての大会と異なる点である。この点を長佐古氏は基調報告で第3回大会を挙げながら消費地編年と生産地編年の二項対立でとらえるのではなく、その中間で発生する“ずれ”や資料を量的に処理することで発生する“例外”に注目すべきことがあるとした。また、資料の量的処理という点に関し、小川氏が指摘するように江戸以外の近世、都市観は全国統一ではないので単純に属性や数量を量的なデータとして一括処理し比較することの難しさがある。このようなマクロ的視点とは対照に内野氏がとりあげた御庭焼のように江戸藩邸内というミクロな生産・消費・流通も今後の類例集成により江戸の消費に新たな一面が見いだせると期待している。さらに両者の視点を組み込んだ梶原氏の報告はかわらけという用途が限定的で使用場面が共通しているものも、独自性があるとした。

以上、過去の大会と異なる2点を挙げ、今大会と比較した。これらの変化に『図説江戸考古学研究事典』の完成が果たした役目は大きい。すでに刊行より9年が経っているが、『図説江戸考古学研究事典』が完成したことにより、江戸遺跡や出土遺物を集成する段階から“考察する”段階へ移行し、やきものをみるのではなく、やきもの“から”みる視点へと変化したのではないかと考えられる。この点を今大会の討論では「やきもの研究は編年を越えられたのか」という課題とされた。

江戸の特性は消費地として全国よりモノが集まることである。これにより多様な器種の編年が可能になり、編年からみる型式変化を画期ととらえモノの機能と用途の推察してきた。その結果として通史的にやきものを把握することができ、堀内氏が指摘する国産品と貿易陶磁との対外的な背景が国内の生産・流通活動へおよぼす影響、成瀬氏が述べた文化・生活の高まりといった社会的な背景と器種の増加の関係などが連動して考察できるようになった。しかし、これは江戸のモノの消費の多様性に着目したに過ぎず、居住地域や階層性など複数の因子が混在する都市の特殊性を編年に組み込むことで更なる深化ができるのではないかと。今大会では江戸の都市性に目を向け、高島氏が江戸のニーズに応える生産地の報告をおこなったように消費地江戸はモノの量や型式に影響を与えているとした。高島氏のいう消費地江戸を大きな場としてとらえた場合、江戸の中には小さな消費地として成立する場があり、水本氏が指摘するように各遺跡の特徴を重視するということは、江戸と

いう枠に遺跡を当てはめるのではなく、集合体としての江戸の姿が本来は望ましいのかもしれない。成田氏がとりあげた植木鉢も巣鴨地域の植木屋が密集する地という特殊な環境を遺物の解釈に組み込み、既存の遺物の機能や用途観ではなくその土地での使われ方を重視した報告であった。今後は江戸全体の復元だけでなく、個々の遺跡にもとづいた個々の生活史への還元がされるべきであり、さらには新たな編年の方向性を確認した大会であった。私の現在の関心は漆器である。漆器は木製品であるためやきものに比べ残存率が遺跡の立地により大きく異なるため、量的な分析、器種別編年を組むことや生産地同定をおこなうことが難しい。そのため、編年作業を越えた遺物解釈をどのようにおこなっていくのかという点で今大会の発表や討論は有意義であった。最後に生活史の復元へのアプローチとして他分野、特に絵画資料の援用についての言及があったのでふれておきたい。近世考古学は資料解釈に文献史料や絵画資料を用いることで解釈の幅が広げ、江戸では出土量に負けない豊かな生活史を復元してきた。しかし、考古資料以外の資料を盲目的に信用し、その妥当性を検証するプロセスを省くことは解釈誇大になり危険である。この危険性を中野氏は箱庭道具をとりあげ、絵画資料に描かれる玩具との概念差を示した。このように他分野の援用は考古資料への解釈だけでなく、考古資料からの問題提起が可能であり、分野間での切磋が期待される。さらにフィールドワークから製作・技術の実態や写真資料の検討をおこなった小林克氏の報告はまさに民俗学との協働であり新鮮であった。

前回大会の「近世江戸のはじまり」のように中世と近世、江戸と郊外の視点に加え、小林謙一氏が指摘したように近世から近代という視点が必要とされるなかで近世考古学の果たす役割は歴史の連続性、非連続性をみる上で避けては通れないほど大きくなった。それは同時に江戸の都市性に着目し、閉じられた御府内の江戸ではなく、周辺地域も含めた開かれた江戸を私たちに改めて意識させることでもある。

※都築由理子さんの大会参加記は、事務局の手違いにて前号に掲載予定でしたが、遅れてしまいました。ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。